英語音声での映画視聴における自律性の活用

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松岡, みさ子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6675

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

英語音声での映画視聴における自律性の活用

松　岡　みさ子

1. はじめに

本稿は何らかの事情により教室で行う授業に出席することができない学生を対象とした，特別個別指導の報告である。この取り組みは，筆者が勤務する大学[1)]で10年以上にわたって実施してきている。対象としているのは，1，2年次に必修の英語科目の単位が未修得のまま3，4年生になった学生で，英語の力はおしなべて低めである。心理的な問題を抱えている場合は，体調が安定していないことも多い。結果として単位修得に必要な出席回数を満たすことが難しくなる。中には英語科目の再履修を繰り返す学生もいる。このような状況にある学生の単位修得支援として始めたのが「学期中に映画を英語音声で2作品見てレポートをまとめ，筆者に報告する」という個別指導であった。困難を抱えている学生の学修を支えるための取り組みの報告である。

---

1) 大妻女子大学社会情報学部

2. 指導の背景

2.1　3 つの要因

このような個別指導に至った背景として筆者は 3 つの要因が絡み合っている，と考える。

- 授業に出席できない
- 基礎的な英語力の問題
- 多様化した授業のスタイル

2.2　授業に出席できない

中尾（2017）が指摘するように，近年「目に見えない困り感」を抱えた学生が増えてきている，と思われる。この「困り感」とは「人間関係がうまくいかない」「特定の状況や場所への恐怖」「急に体調が悪くなる」などのことを指す。

結果として，単位修得に必要な出席回数を満たすことができなくなる。中には大学入学以前から不登校を繰り返してきた，という学生もいる。筆者の所属する学部では，英語関係の科目は，1 年次には各学期 2 科目，2 年次には 3 科目ある。本人としては「何となく学校に行けない」状態が少し続いただけであっても，あっという間に最高 10 科目が 3，4 年次への持ち越しとなってしまう。

そもそも心理的な問題を抱えていることに加えて，単位未修得という新たな問題が降りかかるのである。

2.3　基礎的な英語力の問題

このような状況に至る学生の多くは概して英語力が高くない。

多様化した入試形態により，基礎的な英語力，勉強の習慣を身につけていない学生の割合が多くなった（小田井，2010）。高校はおろか，中学で学ぶはずの基礎的なことが身についていない学生が入学し，必修の英語科目の単位修得に臨むのである。入学時にクラス分けテストを受け，結果に基づいて出席する授業は決まるものの，困難な状況は避けられない。

学業のつまずきは，磯部他（2006）が指摘するように大学から足が遠のく契機となる。結果として，2.2 で指摘した内面の問題が複雑化する。

2.4　多様化した授業のスタイル

英語科目が再履修となる学生が抱える問題は，多様化した授業のスタイルとも関係する，と考える。

社会において求められる「グローバル人材」の育成を目指して（市村，2016），大学の英語教育でもコミュニケーション力を高めることを目的とした指導が増加した。結果として，アウトプット重視型の授業が定着したといえる。グループワーク，ペアワーク，プレゼンテーションなど，他の学生との関わりが欠かせないスタイルの授業も少なくない。このようなアクティビティで力をつけていく学生がいる一方，これを負担に感じる学生もいる。小田井（2010）の指摘にもあるように，コミュニケーション重視という方向性は正しいものの，学生の英語力を考えるとうまくいかないこともある。

単に教室に座り，教員の説明や他の学生の発言を聞くだけで授業は終わらない。そもそもの英語力の問題に加えて，再履修の場合には，自分とは違う学年の学生と関わっていくことになるのである。心理面での困難を抱える学生は，このような状況を負担に感じるのだ。

以上，「授業に出席できない」「基礎的な英語力の問題」「多様化した授業のスタイル」が絡み合うことにより，英語科目の再履修を繰り返す学生が目立つようになった，と考える。

3. 英語音声で映画を見るということ

3.1　課題の意義

英語科目の再履修を繰り返す学生に対して，「学期中に映画を英語音声で 2 作品見てレポートをまとめ，筆者に報告する」という課題を与え単位修得に至るよう，10 年以上取り組んできている。この課題の意義は以下の 3 点にまとめられる。

- 課題としての新鮮さ
- 自律性の促進
- 自己効力感の向上

3.2　課題としての新鮮さ

映画を英語音声で視聴することは，対象となる学生にとって新鮮な課題，と考える。

ここ近年，洋画よりも邦画を好む，あるいは洋画にを見るにしても，日本語吹き替え版でしか見ない，という学生が多い。学生との日常の会話で，このことはよく耳にする。吉村（2017）も指摘しているように，洋画を見ると言っても，英語で音声を聞き，字幕で内容を追うことが当たり前ではなくなってしまっている。洋画はあまり見ない，見るにしても日本語吹き映え版で見ることが普通なのは，英語を専修とする学生にも当てはまることだそうだ。

このような状況で，英語の音声で会話を聞き，日本語字幕を参考にして内容を理解する，という課題は新鮮な内容といえる。また，英語の音声をずっと聞き続けることは英語力の高くない学生にとっては，十分に取り組みがいのある課題となる。

3.3　自律性の促進

見る映画を自分で決め，どの部分をレポートで取り上げるかを決定していく過程は学生の自律性を促す，と考える。

中学，高校の英語の授業では，教材の多くは教員が指定する。プレゼンテーションのテーマの選択など特別な場合を除いては，何を取り上げるかの選択に学ぶ側は関わらない。学ぶ内容について学生の意見は反映されない。

カレイラ松崎（2008），カレイラ松崎（2015），はドルニェイ（2005）が提案する 35 の「動機づけストラテジー」のうち，ストラテジー 29 に基づく指導の報告をしている。ストラテジー 29 とは「学習者自律性を積極的に促進することにより，生徒の動機づけを強化する」というものだ。ストラテジー 29 はさらに 3 つの具体的な側面に分けられている。このうち，29-1 では「学習過程のできる限り多くの側面について，学習者が真の選択をすることを許容する」というものだ。

カレイラ松崎（2008）は，「自分の好きな有名人について調べ，レポートを書く」というタスクの報告である。学習過程の多くの側面において選択の自由を与えることで，英語学習に対する意欲の向上が認められた，としている。また，カレイラ松崎（2015）では，学生自身が授業で使う問題作成に取り組んだが，主体的な役割を任されて学生は満足感を得た，と報告している。

本稿で取りあげる指導は，レポートで取り上げる映画の選択から始まる。これはドルネェイ（2005）のストラテジー 29，具体的には 29-1 の「学習過程のできる限り多くの側面について，学習者が真の選択をすることを許容する」に沿うものといえる。

さらに，英語音声で映画を見ることに抵抗感がなくなれば，この指導終了後に自主的に英語音声で見る，という行動も期待できる。つまり英語学

習全般に関わる自律性促進にもつながる，と考えられる。

3.4　自己効力感の向上

自分で見る映画を決め，自分に適した見方で見ていくことは学生の英語学習に対する不安感を低減させ，自己効力感を向上させる，と考える。自己効力感とは，三宮（2008），城一（2013）にあるように「この課題ならできる」という期待，とする。

基礎的な英語力を身につけていない学生の多くは英語を学ぶことに対して強い否定的な感情を抱いている。清田（2010）にもあるように，このような学生は中学，高校で英語がうまくいかなったことをずっとひきずり，大学生となっても学習に対する動機づけが大きな問題となる。こうした学生を対象に牧野（2013）は「リーディングリレー」という，学生が「これまでの英語授業と異なる」と感じる授業を行った。その結果，英語学習に対する自己効力感が高まるにつれ，英語に好意を持つようになった，としている。

これまでの授業でやってきたことと同じではないことに加え，不安感を刺激しない，興味のある映画を使う課題は自己効力感を高めることにつながる，と考える。

4.　指導の内容

4.1　対象者

指導の対象となるのは，筆者が所属する学部の 3，4 年生で，英語科目の再履修を繰り返している学生である。1 回目の再履修の場合は対象としない。授業に出席し，単位を修得することが本来あるべき姿であるからだ。

4.2　指導の流れ

具体的な指導の流れは以下の通りである。

- 課題の説明
- レポート作成
- 課題の報告

4.3　課題の説明

この指導の重要なポイントは初めの課題の説明にあると考えている。筆者の研究室にて行う。英語科目が再履修となり，何らかの事情で授業に出席することができない，という学生は英語に対して苦手意識，不安感を抱えている場合が多い。そのような否定的な感情を助長しない雰囲気を初めに作ることが大事，と思われる。

説明では以下の 3 点について触れる。

- 課題の内容
- 映画の選び方
- 映画の見方

4.3.1　課題の内容

まず，課題の内容を説明する。授業に毎週出席する代わりに，学期中に映画を 2 作品，英語音声で見て，レポートを作成，筆者の研究室に来て報告する，というものだ。こちらで見るべき映画を指定しない理由は，学生が見たいと思う作品を課題として取り上げるほうが，最終的には課題に前向きに取り組めると思われるからだ。

4.3.2　映画の選び方

基本的は「洋画を見てほしい」とは思うものの，3.2 で述べたように，

そもそも洋画は見ない，見ても日本語吹き替え版で見る，という学生もいる。邦画でもスタジオジブリの作品など，英語音声，英語字幕で見られるものはある。抵抗感を低減するという意味で，取り上げる映画は洋画，邦画どちらでもかまわない，としている。

見る映画の内容であるが，英語が分かりやすいもの，ということで，ファミリードラマ，ラブコメディなどを勧める。学生が興味を持ちやすいことから，アニメーションも対象としている。アニメーション作品には英語のスピードも適切と思われるものも多い。アクション，ホラー系が好き，という学生もいるが，これらのジャンルのものは英語が早い，表現が難しいなどの理由から課題としては適さないことを伝える。

取り上げる映画はすでに見たことのあるもの，まだ見たことのないもの，どちらでも構わない，としている。たとえ見たことのある作品でも，課題として取る上げるとなると見方を変える必要があるからだ。学生の映画視聴歴を聞き，具体的に見てみたいと思う映画を尋ねる。その場ですぐにいくつか候補を挙げられる学生もいる。

さらに注意すべき点として，英語字幕があるか，ということである。これは会話のやりとりの書き出すのに必要だからだ。

学部共同研究室にも貸出用の DVD はあるが，ほとんどの学生はレンタル DVD，近年はストリーミングで視聴する。

4.3.3　映画の見方

英語科目の課題なので，英語音声で聞く，というのがゴールである。しかし，洋画はほとんど見ない，見ても日本語吹き替え版だけ，という学生がいきなり英語音声で見るというのは抵抗感を引き起こす可能性がある。そもそも日本語字幕を追っていく，ということに慣れていない。そのため内容を理解するために，初めに日本語吹き替え版で見てもよい，としてる。取り上げる箇所が決まったら，英語字幕を表示し，会話のやりとりを

確認する。そして必要に応じて英語音声で繰り返し見るよう指導する。

4.4　レポート作成

レポートの長さは1作品について，1ページ半から2ページ弱を目安としている。1作品につき，3つのシーンを取り上げる。各シーンについて，以下の2つを盛り込む。

- 会話のやりとり
- 取り上げた箇所の考察

4.4.1　会話のやりとり

1作品につき，3つのシーンを取り上げる。3か所は作品の前半，途中，後半から選ぶこととする。会話の内容にバラエティがあったほうがよいからだ。選ぶポイントとして，「使われている英語の表現に対する関心」「ストーリー展開のおもしろさ」「会話の内容への共感」などが考えられる。このように3つの項目として挙げられるものの，実際はこの3つの相互作用で，ある特定のシーンに「興味を惹かれる」のだと思われる。厳密にこの3点を分ける必要はない旨，伝える。

取り上げるシーンについては，実際の会話を書き出す。字幕を英語にしてこれを行う。会話のやりとりの長さは，話者が2人の場合，両者がそれぞれ最低3回の発話を行うことを目安とする。以下のように書き出す。

話者A：....
話者B：....
話者A：....
話者B：....
話者A：....
話者B：....

シーンにより、これより長くても構わないが、逆にあまりにも短いと考察の内容が薄くなってしまう。

4.4.2　取り上げた箇所の考察

考察の内容はどのような理由でシーンを選んだかによって変わってくる。英語の表現について関心を持った，ストーリー展開のおもしろさ，会話の内容に共感できるかなどが考えられる。特に項目ごとに分けての説明は求めない。

英語の表現について触れるのであれば，単語，成句などで自分が知っていた用法とは異なる場合が考えられる。

ストーリー展開に惹かれて選んだ場合には，そのシーンに関する感想，社会や文化について新たに学んだことなどが含まれる。これには英語の表現も関わってくることもある。

会話の内容に共感する，ということに関しては，ストーリー展開と英語表現の相互作用である場合が多い。

以上，会話の書き出しと考察を合わせて，結果，1 シーンにつき半ページ強にまとめる。全体が 1 ページ半から 2 ページ弱のレポートととなる。

4.5　課題の報告

学期中に 2 回，課題の報告を行う。1 作品見たら，報告に来る。映画を見てまとめたレポートを参考にしながら，その内容を筆者に説明をする，というものだ。これは 30 分程度を要する。

報告の目的には，レポートの内容について質問する，補足説明を与える，英語学習に対する不安感の低減を図る，などのことが含まれる。

学生は初めに，その映画を取り上げた理由，映画のあらすじを述べる。

次にシーンごとに見ていくが，まず，会話のやりとりを音読する。音読をするということ，そのための練習の必要性は課題の説明の時に伝えてあ

る。発音，アクセントなど指導は必要に応じて与える。なぜ，そのシーンを選んだのかについても尋ねる。考察の報告では，まとめてきた内容の確認を行う。

最後に課題そのものに対する感想も聞く。

5. 学生のレポート

5.1　取り上げた映画

これまでに学生が取り上げた映画は，洋画，ディズニーのアニメーション，スタジオジブリ作品である。

洋画で一番よく取り上げられきた作品は「プラダを着た悪魔」だ。女子学生の視点から共感しやすい映画の１つといえる。ファッションの面で話題にもなったが，女性が仕事にどのように取り組んでいくか，というテーマは就職を控えた学生の関心を捉えるのだと思う。その他，学生が選んだ作品として

- 「ローマの休日」
- 「ホーム・アローン」
- 「タイタニック」
- 「キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン」

などがある。

アニメーションでは

- 「アナと雪の女王」
- 「ピーターパン」
- 「トイ・ストーリー」

が使われてきた。中でも「アナと雪の女王」は複数の学生が取り上げてきている。

スタジオジブリ作品でも学生の関心を一番引くのは「千と千尋の神隠し」である。その他の作品としては「魔女の宅急便」がある。

以上，学生は様々な内容の作品を取り上げてきている。

5.2　会話とその考察

1つの作品について，学生は3つのシーンを選び，会話のやりとりを書き出し，考察を行う。シーンを選ぶ時のポイントとして「英語の表現に目が止まった」「ストーリー展開がおもしろかった」「会話の内容に共感した」などがある。

5.2.1　英語の表現

以下は「アナと雪の女王」（デル・ヴェッチョ他，2013）を使った，あるレポートの内容である。

Elsa：Hi.
Ana：“Hi” me? Oh.... Hi!
Elsa：You look beautiful.
Ana：Thank you. You look beautiful-ler. I mean, not “fuller”. You don’t look fuller. But more beautiful.
Elsa：Thank you. So...this is what a party looks like.
Ana：It’s warmer than I thought.

学生は beautiful-ler に注目した。普段は使われことのない表現であることに着目し，また，そのすぐ後に続く部分で fuller が使われていることをおもしろいと思ったそうである。「ふくよかな」などの語を想像して字幕を確認したところ，「でも負ける…お姉さまほうが綺麗よ」で，吹き替え版では「私なんかよりずっと綺麗よ」となっていたとのことだ。また，最

後の部分の，パーティが warmer という言い方にも興味を持ったようで，字幕が「思ったよりずっと楽しそう」となっていたのもおもしろく感じたそうだ。

この学生は他のシーンに関しても，英語の表現のおもしろさ，また，字幕とのずれに関心を示し，そのことを中心にレポートをまとめた。

次にスタジオジブリ作品を取り上げた学生のレポートを紹介する。この学生は「千と千尋の神隠し」（宮崎，2001）が好きで何度か見たことがあったとのことだ。取り上げたのは以下の部分である。

Chihiro：May I please work here? ....

Yobaba：This isn't a place for humans. It's a place for the Gods to get some rest and relax. Look at your parents, eating our guests' food like pigs. They deserved that. You won't be able to go back to your world.

極めて日本語的な表現ともいえる「八百万の神様」「当然の報いさ」が英語ではどのような言い方になるのかが気になったという。英語で見てみると，単に Gods となっていたのが「印象的」であったとしている。

5.2.2　ストーリー展開

ここで取り上げるのは「ホーム・アローン」（コロンバス他，1990）からのシーンである。

Mom　：How could we do this? We forgot him.

Dad　：We didn't forget him. We just miscounted.

Mom　：What kind of mother am I?

Grandfather　：If it makes you any better, I forgot my reading glasses.

これを取り上げた学生はこのシーンを「この映画の見せ場」と述べている。パリに家族総勢 15 名で旅行に出かけようとしている時，途中で息子を置いてきぼりにしてしまったことに気づいた母親のショックが描かれている。「そこから何としてでも息子に会いに戻ろうとする母親の情熱と行動力」に感銘したそうだ。

また，この短いやり取りの中でも英語の表現を学んだとのことであった。How could we do this? という言い方は気に入り，自分でも使ってみたいと思った，としている。さらに what kind of についても触れている。「どのような種類の」と訳すと覚えていたものの，皮肉，ここでは自分を責める内容になっていることを学んだ，と述べている。

次に触れるのは「タイタニック」（キャメロン他，1997）を見た学生のレポートのである。

Rose：I changed my mind. They said you might be up here.
Jack：Give me your hand. Now close your eyes. Go on. Now, step up. Now, hold on to the railing. Keep your eyes closed. Don't peek.
Rose：I'm not.
Jack：Now, step up onto the rail. Hold on. Hold on. Keep your eyes closed. Do you trust me?
Rose：I trust you.
Jack：All right...open your eyes.
Rose：I'm flying, Jack.

ここはこの映画の代表的なシーンである。船の先端で Rose が柵に足をかけ，両手を大きく広げていくのを Jack が後ろから支える様子が描かれている。学生はこの部分に関して，「ジャックのこの行動でローズは窮屈な毎日から解放された気分になれたのではないか」と述べている。映像を

見ているだけでも何が起こっているかは分かるものの，会話によってさらにその素晴らしさが伝わってくるシーン，といえる。

5.2.3　会話の内容に共感

次に見るのは「プラダを着た悪魔」（フランケル他，2006）の最後に近い部分の会話である。

Greg　：My only question is：Runway?....
Andy　：Learned a lot....
Greg　：I called over there for a reference.... Next thing you know, I got a fax from Miranda Priestly herself saying of all the assistants she's ever had, you were by far her biggest disappointment. And if I don't hire you, I am an idiot. You must have done something right.

これを見た学生は，ここの部分を「心温まるシーンで，とても素敵だった」としている。ここでは主人公 Andy が務めていたファッション雑誌 Runway をやめ，新たな職場を求めて面接に行った時の様子が描かれている。上司の無理難題に応じようと悪戦苦闘，自分は最後まで認めてもらえなかったと思っていたが，そうではないということが分かったシーンである。努力は認められる，というメッセージが学生の感動を誘ったのだと思われる。

このシーンを取り上げた他の学生も And if I don't hire you，I am an idiot. の部分に「とても感動した」と述べている。

その他「プラダを着た悪魔」には学生の共感を呼ぶシーンが他にもいくつかある。主人公が同じ職場の仲間に，自分の仕事ぶりが認めてもらえないことを愚痴るシーンがある。しかし，逆に仕事に対する姿勢を問われ，

自分の甘さを認識するのだが，この部分も何度か取り上げられてきている。

6. 考察

6.1　課題の適切さ

3.1 で取り上げた以下の 3 つの項目に照らして，この指導が適切であったか考察を行う。

- 課題としての新鮮さ
- 自律性の促進
- 自己効力感の向上

6.2　課題としての新鮮さ

特別個別指導として「映画を英語音声で見てレポートをまとめ，筆者に報告する」という課題は学生にとって新鮮な取り組みであったといえる。

初めの課題の説明の時にも確認するのだが，普段から洋画を英語音声で見るという学生はごくわずかである。見る映画は邦画が中心，洋画は見ても日本語吹き替え版を好むという学生にとって，映画を英語音声で見ることは，内容も新鮮な，かつ取り組みがいのある課題であった，といえる。学生がこの課題に好意的な感想を持っていることは，課題報告時に確認している。

6.3　自律性の促進

この課題に取り組むことは学生の英語学習に関わる自律性促進に役立ったと思われる。

英語科目の課題という枠組みの中で「見る映画は自分で選ぶ」「どこの

部分を取り上げるかは自分で決める」と言われて戸惑いを隠せない学生もいる。しかし，自分が関心のあるものを取り上げることの意義を初めの説明の折にきちんと伝えることによって，不安感は低減できる。興味のある内容の作品なら，たとえ苦手な英語が関わっていても取り組みやすい，ということを強調する。

1回目の報告に来た時，次に取り上げたい作品について尋ねる。多くの学生は，同じようなジャンルのものを選ぶ。ここで，あえて違うジャンルを選ぶようには指導しない。自分は何が好きで，どのようなことなら「踏ん張れる」のかを把握していない学生が多い中，興味のあることなら「できる」，ということを実感してほしいからである。

これまでに自分で英語の教材を選ぶということはおよそなかったと思われる。あえて取り上げるものを選ぶところから始めることは，自律性の重要性を認識させ，促進につながることが期待できる。この点については，7. でも触れる。

6.4　自己効力感の向上

取り上げる映画を自分で選ぶことは自己効力感（「この課題ならできる」という期待）の向上にもつながったと思われる。

初めの説明の時に必ずすることは，取り上げたい映画の確認である。候補として学生が挙げた映画に賛同を示すと，前向きな気持ちになっているのが分かる。英語が分かりやすい作品を選ぶようには伝えるものの，基本的に筆者が学生が挙げる候補を認めない，ということはない。これだけでも自己効力感は向上すると思われる。

学期の途中に1回目の報告に来るが，この時も重要である。学生はレポートのまとめ方に問題がないかを心配している。問題ない旨，伝えると大変安心する。英語でうまくいかなかった経験が多いためかと思われる。会話のやりとりを書き出し，考察する，ということができていれば問題な

い，としているが，会話のやりとりや考察があまりにも短いなどのことがあった場合には注意を促す。

この結果，概ね２つ目のレポートはより充実した内容となっている。

7. おわりに

本稿は筆者が勤務する学部での，英語科目の再履修を繰り返す学生に対する特別個別指導の報告である。

自律性を活かすということは，英語学習に不安感を感じている学生の学修を支えていく上で極めて重要と考える。課題そのものは学期中に映画を英語音声で２作品見てレポートをまとめ筆者に報告する，という内容的にはそれほど負担の大きいものではない。

筆者の期待はこの指導の後にある。洋画を英語音声で見たことがほとんどない学生でも，もっと気軽に英語音声に触れる機会を積極的に作るようになってほしいと願っている。英語力に問題を抱える学生は「英語を勉強する」というと，言われたことを言われた通りにやらなければならないと思っている。基礎的な部分については，このことは当てはまるが，応用力は教室外でどれだけ英語に触れる時間を作り出せるかにかかっている。この点に関して，学生には洋画を英語音声で引き続き見るよう，報告に来た時に強調する。

小林（2003）は洋画を使ったリスニングの指導を報告しているが，そこで「授業内の目標言語のインプットだけでは絶対的に足りない」，そして「学習者の積極的かつ意識的なインプットへの行動が不可欠となる」状況で，重要なことは，「洋画を活用した授業で刺激された学習者が，自発的にビデオを鑑賞したり映画館に足を運んだりして，教室外で目標言語のインプットを求めるような状況を生むことは，教育目標の一つとすべきことである」としている（p.11）。そして「そのため教室内での教授法が，そ

のまま個人の学習で実行できることが理想である」と締めくくっている。

レンタル DVD，ストリーミングと洋画の視聴を日々の生活に組み込むことは簡単にできる時代になった。費用の面でも手軽である。あとは学生が実際に行動を起こすだけである。

参考文献

磯部典子他（2006）.「学生相談から見た不登校の現状」『総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集』22, 91-98.

市村光之（2016）.「就業力の可視化③ グローバル人材の要件と大学教育に求められること」『AP/FD ニュースレター』6, 4-5.

小田井勝彦（2010）.「全入時代における大学英語教育」『専修大学外国語教育論集』38, 185-197.

カレイラ松崎順子（2008）.「動機づけストラテジーを取り入れた英語の授業の事例報告」『The Saitama Journal of Language Teaching』2, 2-12.

カレイラ松崎順子（2015）.「大学生の自律性を高める英語の授業—NHK 教育番組「リトル・チャロ」の問題作成と授業実践」『日本英語教育学会第 44 回年次研究集会論文集』17-24.

キャメロン, J. 他（製作）& キャメロン, J.（監督）.（1997）.『タイタニック』［DVD］. アメリカ合衆国：パラマウント・ピクチャーズ.

清田洋一（2010）.「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」『リメディアル教育研究』5（1）, 37-43.

小林敏彦（2003）.「洋画を活用した英語授業のための 10 ステップ統合モデル」中谷安男・八尋春海編『映画英語教育論』名古屋：スクリーンプレイ, 10-27.

コロンバス, C.（製作）& ヒューズ, J.（監督）.（1990）.『ホーム・アローン』［DVD］. アメリカ合衆国：20 世紀フォックス.

三宮真知子（2008）.「学習におけるメタ認知と知能」三宮真知子編『メタ認知—学習力を支える高次認知機能』京都：北大路書房, 17-37.

城一道子（2013）.「リメディアル教育における英語多読—読むことの意欲を高める要因」『語学教育研究所紀要』12, 27-39.

デル・ヴェッチョ, P.（製作）& バック，C. 他（監督）.（2013）.『アナと雪の女王』［DVD］. アメリカ合衆国：ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ他.

ドルニェイ, Z.（2005）.『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』東京：大修館書店.

中尾繁樹（2017, 10 月 10 日）.『「特別ではない特別支援教育」のなかに，多様化する大学生に対応する学生支援のヒントがある。』http://www.kuins.ac.jp/sp/MAPS/_6077.html

フランケル, D.（製作）& フィネルマン, W.（監督）.（2006）.『プラダを着た悪魔』［DVD］. アメリカ合衆国：20 世紀フォックス.

牧野眞貴（2013）.「英語が苦手な大学生の自己効力感を高める授業づくり」『リメディアル教育研究』8（1）, 172-180.

宮崎駿（製作，監督）.（2001）.『千と千尋の神隠し』［DVD］. 日本：スタジオジブリ.

吉村圭（2017）.「短期大学英語教育における映画の活用と授業外学習への動機づけ」『鹿児島女子短期大学紀要』53, 69-82.